

松東遺跡の発掘調査が終了しました。

松東遺跡第3工区（南部分）の調査が3月22日に終了し、今年度の発掘調査を終えることができました。

すでに調査の終了した第1・2工区（北部分）は弥生時代が中心でしたが、第3工区（南部分）では古代における成果も多く得ることができました。

奈良～平安時代（約1200～1300年前）にかけての土地を区画する溝、建物の柱穴、大型の井戸などが検出されたほか、市内初出土となる銅印をはじめ、墨書土器（墨で文字が記されている土器）、鍛冶を行っていたことを示す輔（ふいご）の羽口（はぐち：炉に送風する管）や鉄滓（てっさい：鉄が溶けた際に出る不純物の塊）などが出土しました。

また、調査区の西端は地形が急に低くなっており、当時は川か低湿地だったことがわかりました。



第3工区 全景（東から）



鉄滓：鍛冶が行なわれていたことを示す



井戸の跡：木の柱が残る



墨書土器：いずれも同じ記号が記されている

銅印について

銅印は、奈良時代から平安時代にかけての土地を区画する溝の中から出土しました。縦横2.7cm、高さ2.9cmの大きさで、重さは30gです。

出土した地点の周囲には、建物の柱穴や、鍛冶の痕跡がみられ、集落が広がっていたと考えられます。

銅印の印面には「吉人」（よしひと）という人名が鋳出されています。一緒に見つかった土器や、銅印の形態、人名の特徴から、奈良時代から平安時代前期のものと考えられます。

古代の銅印は、文書等の内容確認のために使われました。大きく、役所で用いられる公印と、個人的に使用する私印に分けられます。本例は人名を示すことから、私印と考えられます。古代においては印を用いること自体が極めて珍しく、印の使用には役所との深いつながりがうかがえます。

松東遺跡周辺の宮井戸川流域には、古代の遺跡が集中しており、遠江国長上郡の郡役所（長上郡家、ながかみぐうけ）があったと考えられています。その中心は大蒲町から和田町一帯とみられますが、そこから東に700mほど離れた松東遺跡に、役所にかかわる「吉人」なる人物が居住していたと想定されます。



出土した銅印：「吉人」と読める



和田地区周辺の古代の役所関連遺跡

今回の調査では、多くの遺構・遺物が確認され、弥生時代の銅鐸、古代の銅印という重要遺物も発見されました。これらの成果によって、和田地区周辺は、弥生時代においては銅鐸が多く出土する拠点的な地域であること、古代においても役所関連施設が広範に配置されている重要な地域であることが鮮明となりました。

約半年余りの間、地域の皆様・駅利用者の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、多くのご理解・ご協力をいただき無事に調査を完了できました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、調査の成果が地域の歴史に興味を持っていただく一助となれば幸いです。